

彗星

彗星は、地球や火星・土星などの惑星のように、太陽のまわりを回っています。その中で、軌道がわかっているものは約600個あります。ハレー彗星もそのうちの一つです。では、なぜこの彗星が特に話題になるのでしょうか？ 次の3つの理由が考えられます。

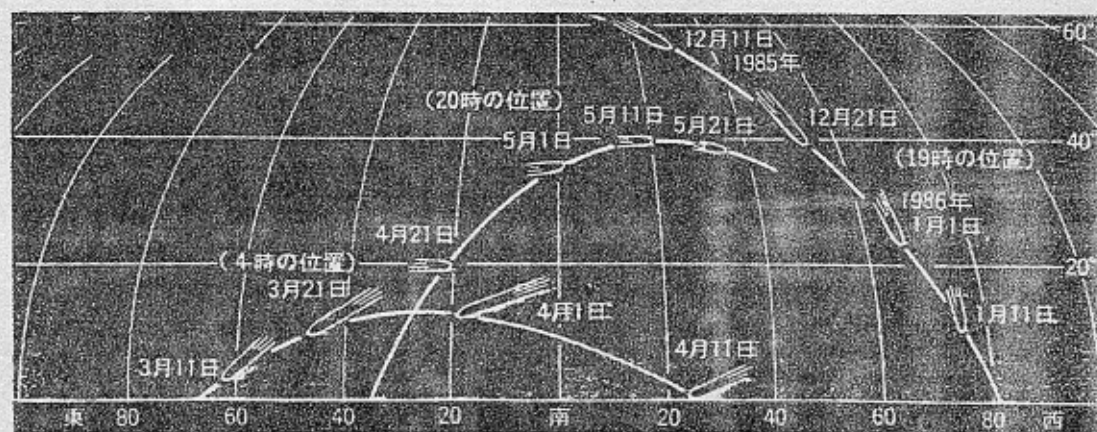
1. 2000年以上も観測されていて、地球に近づく時が予測できる。
2. 比較的大きくて見えやすいこと。
3. 約76年に1回やってくるため、人間の一生の間に1回か2回しか見えないこと。

彗星には普通それを発見した人の名前がつけられます。たとえば「イケヤ・セキ彗星」という彗星の場合は、日本人の池谷さんと関さんが別々に発見したので、この名前がついています。ところがハレー彗星の場合は違います。エドモンド・ハレーという人は、1531年、1607年、1682年に現れた彗星の動きがよく似ていることに気づき、今度は1758年に現れると予言しました。ハレーは1742年に亡くなりましたが、それから16年後に、彼の予言通り彗星が現れました。

そこで、この彗星は後に「ハレー彗星」となづけられました。

来年の3月には、調査のために6台の探査機が、ハレー彗星に近づきます。日本からは2台、MS-T5（「さきがけ」という名前がつけられました）とプラネットA（「すいせい」）が打ち上げら

れました。「さしかけ」は、ハレー彗星に700万キロまで近づきます。また「すいせい」は、20万キロから50万キロ位まで近づいて、彗星の一番外側にある水素ガスでできた「水素コロナ」と呼ばれるものを調査します。米国は以前打ち上げた衛星の軌道を変えてハレーに向かわせます。ソ連は、ベガという探査機を2台打ちあげます。ベガはいったん金星へいき、そこで観測器を落とした後、ハレーをめざし、テレビでハレーの映像を送りながら1万キロまで近づきます。ハレーに最も接近するのはヨーロッパの国ぐにが共同で作ったジオットという探査機で、その距離はわずか500キロ、その時のハレーに対するジオットの速さは秒速70キロメートルにもなります。彗星の中心にある、汚れた雪ダルマのようなものといわれている半径10キロ位の大きさの核の表面がジオットによって見えるかもしれません。(fy)



富山市科学文化センター

富山市西中野町3丁目1番19号 (〒939)

電話 富山(0764) 91-2123(代表)

昭和60年9月1日発行